

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00920

研究課題名（和文）人間の記憶・歴史としてのギリシア・トルコ住民交換

研究課題名（英文）The Greek-Turkish Population Exchange between Memories and History

研究代表者

澤柳 奈々子（Sawayanagi, Nanako）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：60647436

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：口承に基づく歴史研究では、客観性が担保されるかが常に問題となる。1922年の小アジアからの脱出時に、日本船によって救助されたというギリシア系正教徒難民の記憶は、欧米の史料からは実際におこった出来事と判断されるが、日本側の史料の欠如から、歴史的「事実」として完全に実証されたとは言えない。救助に直接従事した日本人の側の証言があつてはじめて、彼らの記憶は、歴史的「事実」と見なすことができるだろう。一方で、この記憶を歴史的事実として語り継いでいる難民の子孫たちにとっての「歴史」のあり方を歴史学のなかでどのように扱うかは課題として残されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一次世界大戦直後に始まったギリシア・トルコ戦争時に発生した難民の記憶に注目して、。人々の共通の体験が記憶として定着し、歴史として記述されていく過程とその具体的な内容を検討した本研究は、バルカン戦争から1920年代末までの時期に東地中海で見られた人の大移動の全体像を解明する一歩となるだけでなく、今日の難民問題研究全般に対し興味深い事例を提供することになるだろう。さらに、ヨーロッパ史、オスマン帝国史、トルコ史、日本史、海運史を横断する本研究は、グローバル・ヒストリーの視野からこの時代を俯瞰する契機を与えるものとなる。

研究成果の概要（英文）：Historical research based on oral sources constantly raises the question of whether a historian can guarantee objectivity. Contemporary Euro-American sources refer to the rescue operation of Greek Orthodox Christian refugees by a Japanese ship. However, evidence from Japan is indispensable to prove the rescue activities by the Japanese ship Tokei Maru was not a "misremembering" or made-up story, but a historical fact.

研究分野：歴史学

キーワード：ギリシア 難民 小アジア 住民交換 日本船 記憶

1. 研究開始当初の背景

(1) 第一次世界大戦後のギリシア・トルコ戦争を経てオスマン帝国は解体し、トルコ人の国民国家であるトルコ共和国が誕生した。この過程で、それまでオスマン帝国の臣民であったギリシア系正教徒住民の処遇が国際社会が解決すべき大きな課題となった。ギリシアの敗戦によって100万人を超えるギリシア系住民が難民となったのである。この人道的危機に対して、連合国、ギリシア、トルコが下した判断は、1923年1月のギリシア・トルコ住民交換協定（より広義には1923年7月のローザンヌ条約）として具体化した。民族自決の原則に基づき、ギリシア系住民は「母国」ギリシアに「強制的」に移動させられることになった。一方、当時のギリシアには、オスマン帝国支配時代からのイスラーム教徒がいた。ギリシア系正教徒住民のギリシアへの移動と引き換えに、ギリシアのイスラーム教徒住民のトルコへの強制移住が実施された。最終的に、小アジアからギリシアへは約120万人が、ギリシアからトルコへは約40万人が難民として「あらたな祖国」へと移動を余儀なくされた。

(2) この「強制的」住民交換という世界史上初めての事例に対する評価は二分されている。東地中海地域の平和の維持の実現、および、民族的な同質性を高めたギリシアとトルコ双方の国民国家の形成に有効に作用したと肯定的に評価する立場がある一方で、強制的住民交換は実質的に「民族浄化」を意味しており、国家の論理のために個々人の人権が蹂躪されたという否定的な主張もなされている。ギリシア・トルコ住民交換に関する歴史学からおける評価は、第一と第二の立場両者にまたがっている。国民国家を前提とする政治・外交は、住民交換によってほぼすべてのギリシア民族が国境内に包摂され、国民的統一が図られたことを好意的にみる傾向が強い。一方、難民個々人の故郷への思いやアイデンティティの揺れを扱う社会・文化史は、住民交換が難民に残した傷跡により注目している。

2. 研究の目的

(1) 以上のような背景をふまえて、本研究が取り組んだのは難民の記憶の問題である。住民交換から1世紀が経とうとしている現在、難民の体験がどのように人々の記憶として共有され、歴史として記述されていったのかを検証することを目的とする。具体的には、1922年9月、小アジア西岸の港湾都市スミルナから脱出したギリシア系正教徒難民の体験の記憶——特に日本船によるギリシア人難民救済の記憶——に焦点をあてる。難民の記憶が集団の記憶として定着し、歴史として再構成されるにいたるまでには、難民自身による記憶の取捨選択や、難民の語りを報道した新聞を中心とするメディアの操作が少なからず存在したはずである。難民の記憶を収集した記録を歴史上の出来事と照合しながら、どのような記憶が残り、どのような記憶が消えているのか、具体的事例に即して検証し、残された記憶に共通する特徴を明らかにする。難民の記憶の方向付けに対してメディアがあてた影響もみていく。

(2) 本研究は、住民交換を肯定的、あるいは否定的に評価する、いずれかの立場を明らかにしようとするものではない。ひとびとの共通の体験が記憶として定着し、歴史として記述されていく過程とその具体的な内容を検討することで、難民自身が住民交換をどのように意味づけ、みずからの記憶を歴史として再構築したのかを詳らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、ギリシア・トルコ戦争末期に日本船に救済されたと伝えられるギリシア系正教徒難民の記憶に基づく歴史を扱う。この「歴史」はこれまで史料的に裏付けられたことはなく、難民の記憶のみに依拠し、口承で伝えられてきたいまだ書かれざる「歴史」である。本研究では、この記憶に基づく歴史が、どの程度実証に耐えうるものであるのかを検証する。

(2) ギリシア人難民が記憶する日本船によるギリシア人難民の救済という出来事が歴史的事実であったのか、単なる記憶による語りが生み出した架空の物語だったのか、その真偽を明らかにするために、当時発行されたギリシア、欧米、オスマン帝国、日本の新聞記事や海運関連雑誌、欧米、トルコ及び日本の公文書、船舶運航記録、港湾局出入国記録等の一次史料を閲覧、収集して分析と検討をおこなった。

4. 研究成果

(1) 1922年9月の小アジアからの脱出時に、日本船がギリシア系正教徒難民を救助したという文書による記録は、欧米の新聞記事から多数発見された。ギリシア語の新聞には救助にかかわった日本船の船名とギリシア系難民を擁護するためにトルコ兵を毅然とした態度で追い払った船長の台詞まで掲載されていた。公文書関連では、当時の在スミルナ米総領事ジョージ・ホートン

が、伝聞ではあるが日本船による難民救済をアメリカに報告している記録が残っていた。一方、日本船によるギリシア系難民の救助活動について、日本語で書かれた同時代の史料は全く発見できなかった。当時の日本が、地理的に遠く離れていた小アジアの戦争に全く興味を持っていなかったという説明は当てはまらないように思われる。というのは、ギリシア・トルコ戦争の経過、およびスミルナでのトルコ人によるキリスト教徒虐殺、そして難民救済のための「救恤費」が日本から当時国際連盟で難民対策にあたっていたフリチョフ・ナンセン宛に送られたという記事がこの時期の日本の新聞に頻繁に掲載されているからである。

(2) ギリシアの新聞に掲載されていた日本船の船名 TOKEI MARU は、当時実在した東慶丸であると推定される。この船は、日本の植民地であった大連船籍の船で、所有していたのは神戸に本社を置く大連東和汽船だった。さらに、1922年には地中海に向っていたことも判明した。スミルナでギリシア人難民の脱出がおこった1922年9月当時の船長名は、日比左三であることも史料から判明した。日比氏の親族を探しあて、佐三氏の妻の記した回顧録を閲覧させていただいた。しかしながら、そこには難民の救済活動についての言及はなかった。ただし、日比氏の母親が正教徒であることが判明した。もし彼が難民の救済に関与していたとしたら、その背景には、母親を通して正教への理解があったからという点もあるのではないかと推察する。

(3) 日本船による救済を伝える欧米の新聞報道の内容の中には明らかに現実的ではない記述も散見される。このことから、欧米の史料を扱う際には十分な注意が必要であろう。また日本船による救済活動は火災のさなかに劇的なかたちでおこなわれていたと難民とその子孫は語り継いできたが、発見された東慶丸の入港記録等と照らし合わせると、火災の日付とかならずしも一致していないし、救済も1回ではなく複数回あった可能性も浮かびあがる。さらに、史料によって日本船が難民を送り届けた港が異なる点も見逃せない。

(4) 以上のように、現時点の史料の状況からは、日本船による救済活動については歴史的に実証されたとは言い難く、その詳細については推測の域をでないと言わざるを得ない。口承に基づく歴史研究では、客観性が担保されるかが常に問題となる。史料の信憑性を厳しく問うなら、この出来事は危機にあった難民の記憶が生み出した架空の物語であるという可能性も捨てきれない。いずれにしても、この出来事を歴史的事実であると実証するためには、救助に直接従事した日本人の証言といった日本側の史料の発掘が不可欠であると考えられる。危機的状況の中で、上記で述べたような、記録と難民の記憶に食い違いが生じることは容易に想像できるが、このズレをいかに解釈し歴史研究に生かすかは今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nanako Murata	4. 巻 47
2. 論文標題 Considering Narraives and Facts of the Rescue Activities by a Japanese Ship in Smyrna in 1922	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋大学文学部紀要史学科篇	6. 最初と最後の頁 1, 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nanako Murata	4. 巻 35
2. 論文標題 Geek Orthodox Christians Memories of the Last Phase of Their Lives in Asia Minor	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Acri Research Paper Series Modern Japanese Images about Turkey	6. 最初と最後の頁 83-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Nanako Murata
2. 発表標題 To iaponiko ploio stin Smyrni to 1922: to afigima kai i istoria
3. 学会等名 TOKEIMARU 1922-2022（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nanako Murata
2. 発表標題 Greek Christians' memories about Asia Minor before the Population Exchange in 1923
3. 学会等名 International Symposium: The Formation of the Relationship between Modern Japan and the Islamic World（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------